

乳幼児期における文学の考察

— 威嚇的な表現をめぐって —

神立 幸子

(序) これまで2回にわたり、伝承童謡(わらべうた)と創作童謡との対比の中で、児童文化の表現としてふさわしい歌詞をとりだし、その文学性について考察してきた。そこで気づかされたことは、実生活に根拠した庶民的なわらべうたは、今日の子どもの中にも入りこみ、活気を呈するということである。わらべうたは日本の近代化、西洋化の上では卑俗的なものとして退けられてきたが、威嚇的な表現もそれにはれるであろう。日常生活の中で、直接的なおどし文句を連発することは問題であるが、文学的な表現をかりてなされるときは、昔話の残酷性の受けとり方と似たようなはたらきをするのではなかろうか。このような問題意識のもとに、「日本伝承童謡集成」(全6巻 北原白秋編三省堂)の中から見直したい威嚇的な表現をとりだし、分類する中でその形成の仕方、意識の仕方等に若干の考察を試みた。

A おとなが主にうたう詞

①「柳の下からばけが出た」ばけはおっけおっけぬんぬんよ。」「泣いたら狼に食わしてやる。」

恐ろしいものが現れる。それは怪物、化物、鬼等空想上の妖怪と、狼、蛇等の動物である。それは子どもを食ったり、とったりするこわいものである。だから泣くな、静かにしな、眠りなとおどす。お前がいうことをきかないと、それにやっしてしまうかもしれないと及めかす。そこに子どもはおとなに従うという関係が保たれる。

②「泣くなや泣くなや雀の子、泣くと餌差がさしにくる。」「おころり小山の雉の子は、泣くと山からふくろうが、大きな眼して食べに来る。」

弱肉強食の関係(小鳥と人間、小鳥と猛禽等)の中で、弱小なものが食べられるのは、身の程をしるまえず泣き騒ぐからだとおどす。泣くということは子どもによくあてはまるので、わが身におきかえてとりやすい。

③「小刀コとげたがとげたがよ、鬚いたが、マキリ持った雪女、太股の肉とりぬ来た。」「この子泣いたら俵に入れて、土佐の清水へおくります。土佐の清水は海より深い、底は油で煮え殺す。」「狸入れうつつけ雉の子よ、泣くとお鷹にとられるぞ、お鷹にとられたその時に、けんけんばたばたせぬがよい。」

婉曲な飾りたてによって、動きのある具象的なイメ

ージが浮かぶ。こわいものみたさでひきつけられるなかで、この世にはおそれなければならぬものがあると感じる。それからまぬがれるにはおとなのいうことに従い、その庇護をうけようとする自衛本能もはたらく。一方おとなというものは子どもを守るだけではない、分離しようともする存在と心得る。

④「泣くと長持しよせせるぞ。…おこるとお釜をかぶせるぞ。…すねると摺鉢かぶせるぞ。…はねると半てんかぶせるぞ。…笑うとわらの中に入れてやる。…ほえると(時分)つみに来る。」「いい子だ黄粉だ巨の粉だ、ねんねしてくれごしょうだから、五升が一斗にな、たらやむから、やむよ頼むよ佛さま、佛の下には鬼がいる、鬼が一匹蛇が七つ。」

おどし文句の中に、ごろあわせや鎖つなぎを入れて賑やかであるが、そこにおとなのいうまじにならない子どもの活気を感じる。ことばあそびの意外な展開の中に、身の上の苦味を求めた親しさと、おどきの逆作用である滑けい味がとけあっている。そこにおこる笑いがおとなと子どものたて関係の中にも和合する気持を抱かせる。

⑤「あの子よい子だ、お蝶蝶がとまる、この子すっかん子で蜂が刺す。」

いい子、悪い子のありようを対照的にうつしだし、聞き手の子をそばでてる。そこに優越感、劣等感、差別意識、嫉妬心も芽ばえるが、直接自分につれてないので気持ちをたて直す余裕もある。

B おとなもうたうが、主に子どもがうたう詞

①「ニニば桑原、竹の根、(雷)落ちたらどん腹、突っこぬこ。」「福は内、鬼は外、鬼の眼玉打っ(ツバ)せ。」「蜂が刺した子とるぞ、子が刺した子とるぞ。」「蛇も蛇もどうけどけ、俺は鍛冶屋の小息子、櫛も刀も持ってるぞ、首を出したうちゃん切るぞ。」

天体気象、妖怪、動物のこわいものに対し、自分の方から叩きつづける、首を切る等のおどしをかけ、その難をのがれようとする。行事、まじないにも通じるが、そうした文句を口にすることは恐怖心を克服していくことにもなる。大みえを切る痛快さがある。

②「照る照る坊主、照る坊主、あした天気にしておくれ、天気になったら酒一升あげる、ならんと首をちょん切るぞ。」「風、風あがれ、あがらねば煮て食うぞ、

下がると焼いて食うぞ。」^③「鱈、みよう、角出せ、角出さにや、家こわす。」「田んぼの田んぼの、ひゅうひゅうどんどん、鳴らんと頭をちょんぎるぞ、おれも泣くに、われも泣けよ。」「ほうほう、喰来い、あっちの水は辛いぞ、こっちの水は甘いぞ、下さ落れば蛇に吞まれんぞ、上さあがればつばくろに吞まれんぞ。」

相手を恐れてではなく、天体気象、遊び道具、小動物、植物を自分の思うとおりにならうとしておどし文句をかける。自分のいうとおりにならないとお前を切ったり、食ったりするという傍で、おだてたり、自分も泣くからと、泣くことを肯定してうながす。それらに対しては子どもでも優位に立てるというゆとりがある。相手を捕食する動物をだして自分の手に入れようとする知もはたらかせるが、自分はその動物ほど残忍ではないと暗に意識している。

③「大寒小寒、山から小僧が飛んで来た、なんといっで飛んで来た、寒いといっで飛んで来た、茶碗のかけで頭こきり張ってやれ。」「蕎麦とろろ、めがまわって落っこちろ。」「ご豆かゆいそうに、^湯湯の中で、逃げよか走ろか、腹切って死のか。」「鳥、からず、勘左衛門、お前の家は焼けるから、はやくいって水かけろ、水がなけりや湯かけろ、湯がなけりや、茶かけろ、茶がなけりやしっこかけろ。」「鳥、鳥、どこさいぐ、天竺手の湯さいぐ、手にもったなんだ、粟米小米、おれにち、とくんにやいか、臭れれば滅る……痛くばいたちの糞つけろ。」「ひとり息子の兄弟づれが、川へ流れて焼け死んだ。」「一で早食って、二で逃げて、三で探して、四で知れて、五で御免とあやまって、六で牢屋に入れられて、七で篭屋に飛びこんで、八ではりつけ、九で首切られ、十でとうとう死んじやった。」

ある事象やことは遊び等のイメージの終結として、おどし文句が用いられている。全体がその節によって、おかしいながらもひきしまり印象を深くする。驚ろかせて笑っているが、陰湿とは異なる解放感がある。そこに糞尿をもちだすのは日本の特長であるが、それで済むところに穏やかな風土を反映している。

④「泣き虫、毛虫、はさんですてろ、小川へすてろ。」「今泣いた鳥が、はあ笑った、墓場の団子食ってはあ笑った。」「負けて逃げてく煙ねずみ、尾んぼ切られてちゅうちゅう。」「人真似 小真似 酒屋の猫が、田楽焼くとて手を焼いた。」「怒り虫おこたら 松葉でつけ。」

子ども同士のもめごととは、その原因をはっきりさせるより、いちばやく相手をはやしたて、うっぶんをはらす面がある。そのときに用いられるおどしやあざけ

りの文句、身近な小動物にたとえると、いわれる方は一層くやしいが、その中できたえられるものもある。くり返しとなえるのにむいているので、遊びに転化しやすい。

⑤「せれせれこんぼ、押されて泣くな、泣く子は出ていけ。」「指切り 鎌切り 喰いや地獄の釜へ ぽったりしよ。」「わしの影するものは、西の山へ連れてって、鯨焼きに焼いてくりよう。」「ほうりこ ほうりこ 喰い川へはめようか、深い川へはめようか、同じはめるなら深い川へ どばん。」「子とろ 子とろ、どのろが歎しい、泣く子が歎しい、泣く子はおらん、一番うしろの子が歎しい。」「ぼんさん ぼんさんどこいゆく、…… お前がいくと邪魔になる、このかんかん坊主、くそ坊主、うしろの正面だあれ。」「今年の牡丹はよい牡丹、…… 入れて、いや、川へ（海へ、山へ）つれていってあげるから、川坊主（海坊主、山坊主）が出るからいや、じゃ今度うちの前を通ったら通せんぼをしてやるから、じゃ入れたげる、だれか土人の後ろに蛇がいる、わたし、ちがう、だれか土人の後ろに蛇がいる、わたし、そう。」「あぶく立った煮えたった、…… とんとんとん、なんの音、靴（風）のおと、とんとんとん、なんの音、おばけの音。」

おどし文句を開放的、積極的にとり入れ、相手をせめるのではなく遊びを活気のあるものになっている。多少こわいということが、遊びに緊張感のあるおもしろ味を加える。おどす者とおどされる者が交代していくので、バランス感覚がやしなわれる。

（結び）わらべうたの中のおとな側からのおどし文句は、その文学性の高まりにつれ印象深さと遊び心を伝える。その中から子どもがくみとるものは、直接のおどしが受け身的であるのに対し、自主的にとらえたものとして内在化され、能動化される。その表現は文学としての多面性をもつために、必ずしも嗜虐性におち入るのではなく、むしろ虚勢は自信に、痛めつけはいたわりに、痛烈さはユーモアに転化し得る。というのはそれを口にする子ども側が遊ぶことを好むからであり、その中では残酷さは持続せず、最終的には快いことの方が大勢をしめていくからである。その中でつちかわれる主張、拒否、協調等のふるまい方は、子どもが現実にかいか柔軟に対応していく力となろう。

近年の児童文化の内容は子どもの意識の保護を先行させるため活気を失ないがちである。わらべうたのおどし文句は過保護というあり方とは無縁であり、子どもを快楽指向におとしめない、子どもの活力がそこにひきだされると考えられた。